

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26780489

研究課題名(和文)境界領域における民俗芸能の教授・創生に関する研究：奄美諸島の高等学校を中心に

研究課題名(英文) Research into the instruction and creation of the Performing arts interdisciplinary field: The case of study on Amami Prefectural High School

研究代表者

呉屋 淳子 (GOYA, Junko)

山形大学・教育開発連携支援センター・講師

研究者番号：10634199

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究で明らかになった点は、次の二点である。まず一つ目は、学校教育が民俗芸能の新たな継承の場として加わりながら、学校で教授された芸能が地域における伝統芸能の一つとして展開していた。二つ目は、実践的な意味合いで、複数の共同体的な枠組みが相互浸透し合う現象が学校と地域の狭間を往復するなかで起こっており、従来のアイデンティティ形成の議論のみでは可視化できない境界領域の中で新たな民俗芸能が学校で生まれていた。

研究成果の概要(英文)：The main research is focused on the indigenous Amami Performing arts being offered at Amami Prefectural High School which is located on the island of Amami Oshima, part of an archipelago located on the boundary between Kagoshima and Okinawa. With investigative research being conducted into the 'School Arts' concept newly-created from the perspective of Amami Performing arts.

Two key points became evident from the core research. The first being that while school education is now part of a new inheritance of Performing arts, those disciplines now being taught in schools are developing as one of the traditional art forms of the region. The second point was that on a more practical level, a mutual permeation has occurred traversing the threshold between the school and local region in multiple community-based frameworks, with new Performing arts emerging from within this interdisciplinary field which could not be visualised from the discourse alone as set in its existing identity.

研究分野：教育人類学

キーワード：学校芸能 民俗芸能 境界 学校教育

1. 研究開始当初の背景

奄美諸島における芸能は、徳之島と沖永良部の間に存在する「境界線」を分岐点とし、それぞれの地域で展開してきた[e.g 内田 1983;小島 1997]。また、奄美諸島は、鹿児島や沖縄の影響を受けながらも、どちらか一方に帰属することはないという重層的でマージナルな文化的特徴を有している。これは、奄美諸島が琉球弧の文化圏に属する一方で、歴史的・政治的背景において薩摩の直接支配下に組み込まれたことに起因している。当然、こうした状況は奄美諸島の人々の文化的アイデンティティ形成にも大きな影響を与えている。

このように奄美諸島内部が内包する諸問題には、「中央(鹿児島)と周縁(奄美諸島)」という構図に収まらない境界領域が存在しているといえる。そこで申請者は、これまでの理論的枠組みを踏襲して、奄美諸島における民俗芸能の継承やそのあり方を動的に捉えることによって、境界領域における民俗芸能の新たな継承形態が生成される過程を、学校という「場」を通して検討する必要があるという結論に至った。

奄美諸島内部における文化的アイデンティティの形成とその実態について高橋(2007)は、沖永良部の事例を用いて、奄美諸島内部的の複数の文化的アイデンティティが複雑に交錯する状況を指摘し、それは奄美内部の文化の象徴的境界であると説いている[高橋孝代 2007『境界性の人類学 重層する沖永良部島民のアイデンティティ』]。津波(2012)も高橋と同様に、徳之島や与論島でも類似する状況があると述べている[津波高志 2012『沖縄側から見た奄美の文化変容』]。

こうした奄美内部の状況を鑑みて、2013年7月から申請者が行った事前調査では、奄美諸島内の県立高校学校(奄美高校、大島高校、沖永良部高校)では、鹿児島県内のなかでもいち早く部活動のなかで民俗芸能の導入を積極的に行っていたことが明らかになった。そして、こうした活動は、地域社会の人々の協力のもとで指導が行われ、その成果発表は、奄美諸島内部の各地で持ち回りで行われていた。一方で、平成2年に鹿児島県高等学校文化連盟(以下、高文連)の誕生を契機とし、鹿児島県下の全高校を対象とした「鹿児島県高等学校郷土芸能大会」で成果発表が行われるようになった。

こうした「場」の移動は、奄美諸島の民俗芸能が周縁(島)から中央(陸)へ移動することを意味していた。こうした変化は、学校を主体とした文化活動の拡大と同時に、中央(陸)での開催が教師や生徒らの「島代表」としての意識を強化させていた。しかしながら、学校教育と民俗芸能の教授や高文連などの組織が関わることによって、奄美諸島内部でみられる複数の文化的アイデンティティと、「島代表」を意識した教師や生徒たちが周縁

(島)と中央(陸)を往復(移動)しながら民俗芸能を実践する様相やその質的変容についてはいまだ明らかになっていない。そこで本研究は、奄美諸島の学校教育における民俗芸能の教授と創生過程の考察を通して、民俗芸能の質的変容と境界領域における文化的アイデンティティの諸問題を浮き彫りにし、高橋(2007)が提唱する「境界性」の視点を用いて学校教育が民俗芸能の継承に果たす役割や機能を複合的に明らかにしていく。同時に、現代的な文脈における文化継承のあり方や新たに生み出される芸能を視野に入れ、かつ歴史的経緯を考察の対象に据えながら、学校教育における奄美諸島の民俗芸能が創生される過程を分析していく。そして、複雑なアクター(政治性、文化・歴史性)が絡み合う奄美諸島の民俗芸能の動態性や創造性に着目しつつ、持続的な芸能の継承のありかたを探る。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「鹿児島/沖縄」の境界に位置する奄美諸島の高等学校における民俗芸能の教授と創生に着目し、境界領域であるが故に生じる民俗芸能の新しい継承過程の様相を明らかにすることである。奄美諸島の各地域は、鹿児島県や沖縄県の影響を認めつつも、どちらか一方に帰属することはないという重層的でマージナルな文化的特徴を有している。そのうち芸能に関しては、徳之島以北が大和系、沖永良部以南が琉球系の芸能の影響を受けて展開してきた。

本研究は、奄美諸島内部の文化的特徴に焦点を当て、民俗芸能の教授と創成する様相を学校教育から示し、学校教育の果たす役割と機能の検討から、民俗芸能の持続的な継承の可能性を検討する。

3. 研究の方法

本研究は、奄美諸島の高等学校(3校)を対象に、境界領域に位置するが故に生じる民俗芸能の変容や創造の多様な様相を明らかにしながら、奄美諸島の学校教育における民俗芸能の継承と教授形態の今日的状況を描いた。その際、学校における参与観察や聞き取り調査、資料収集に加え、奄美諸島内のそれぞれの地域や学校で実践される民俗芸能とそれに関わる指導者と学習者の関係性を考察し、「複数の文化的アイデンティティ」の特徴を明らかにした。同時にそれが、学校における民俗芸能の教授形態や成果発表(鹿児島県の高文連主催郷土芸能大会への参加や全国大会出場)といった一連の行為にいかなる影響を受けているのかを、周縁(島)と中央(陸)を移動する教師や生徒たちの状況から考察した。

初年度は鹿児島・奄美大島・沖永良部を中心に調査し、次年度は鹿児島を中心に調査を実施した。

また、本研究は、文献調査および現地調査

から構成された。大きなリサーチクエスションは 奄美諸島の学校教育における民俗芸能の教授は、現代奄美諸島の人々の日常における文化的実践のなかでどう位置づけられ、境界領域で見られる「複数の文化的アイデンティティ」とどのように関係しているのか、地域社会と学校の双方が協力し、民俗芸能の継承に力が注がれるとき、そこでは何が重要とされ、どのような取り組みが行われているのか。その一方で、学校教育で実践される民俗芸能が複雑なアクターと関わることによって、指導者の教授内容やその方法が取捨選択され、芸能が変容・持続する過程にどのような影響を与えているのか、の3点である。本研究は、3年計画とし、文献調査および現地調査を実施した。

4. 研究成果

本研究は、「鹿児島/沖縄」の境界に位置する奄美大島に所在する鹿児島県立奄美高等学校で実践している奄美の民俗芸能に着目し、「学校芸能」の概念から新たに創造される奄美の民俗芸能の様相について調査研究を行った。奄美諸島の各地域は、鹿児島県や沖縄県の影響を認めつつも、どちらか一方に帰属することはないという重層的でマージナルな文化的特徴を有している。これは、奄美諸島が琉球弧の文化圏に属する一方で、歴史的・政治的背景において薩摩の直接支配下に組み込まれたことに起因している。当然、こうした状況は奄美諸島で育まれている民俗芸能にも大きく影響を与えていた。

本研究の対象である鹿児島県立奄美高等学校における最初の民俗芸能の実践は、奄美高校の前身校である鹿児島県立大島実業高校時代に、当時の体育科教員の赫幸男氏が体育祭に導入した「八月踊り」であったことが明らかになった。また、この「八月踊り」は、赤木名の八月踊りを高校生が踊り安くアレンジしたもので、現在は、「奄高八月踊り」という名称で親しまれ、学校の「伝統」として受け継がれている。郷土芸能部は、2001年に誕生した。(2001年「六調太鼓同好会」、2002年郷土芸能研究部「太陽の子」、2009年郷土芸能部「太陽の子」) 奄美高校1期生で、赫幸男氏の教え子である松島伸子氏が1993年に理科実習助手として奄美高校に非常勤講師として着任し、「奄高八月踊り」の指導者として2014年まで担当していた。

奄美高校は、奄美諸島内の高校のなかでも、いち早く民俗芸能を導入した学校であることが聞き取り調査のなかで確認された。この八月踊りは、当初、女子生徒だけで行っていたが、1993年以降、男女が交互に歌を掛け合い、歌いながら踊る八月踊りの形が確立した。これは、大島実業高校で最初に八月踊りを指導した体育科の教員の教え子である松島伸子氏が指導を行ったことがきっかけになっている。松島氏は、1993年の奄美大島復帰40周年記念県民体育大会で披露した奄美高

校生による八月踊りの演舞指導者だった。八月踊りの指導をきっかけに、松島氏は奄美の民俗芸能を生徒たちに教えるようになったことが聞き取り調査から明らかになっている。

現在、郷土芸能部は、奄美大島内外において積極的に成果発表を行っている。特に、鹿児島県立高等学校文化連盟が主催する鹿児島県高等学校郷土芸能大会の「伝承芸能部門」では、その演舞が高く評価され、鹿児島県代表として全国大会にも出場している。こうした奄美高等学校の郷土芸能部の活動は、奄美大島と鹿児島を移動する中で行われていると同時に、地域の文化的文脈を理解しつつも、その多くは複雑なアクター(政治性、文化・歴史性)からの条件や要求などの影響を少なくとも受けていた。

そのようなことから、本研究では、現代社会における民俗芸能の教授と創成の様相を学校という特定の「場」から示し、民俗芸能の持続的な継承の可能性について検討した。その際、民俗芸能の実践を真正な(authentic)文化現象としてのみ捉えるのではなく、学校と地域の相互行為から生成した新しい文化として捉えることによって、学校と地域社会との関係を読み解き、学校という場もつ多様な機能と役割から、民俗芸能が創造されながら継承される様相について解明した。具体的には、次の二点である。

まず、一つ目は、実践的な意味合いで複数の共同体的な枠組みが相互浸透しあう現象が学校と地域の狭間を往復するなかで起こっており、従来のアイデンティティ形成の議論のみでは可視化できない境界領域のなかで新たな民俗芸能が学校で生まれていた。また、先行世代から受け継がれてきた伝統芸能が、各地域社会への帰属意識の生成に伴い、地域を強調した内容へと発展していた。さらに、このような状況は、地域社会内部で形成された文化的アイデンティティが発揚される過程において生成し展開してだけでなく、学校教育における「伝統芸能教育」が地域社会においても重要な意味を担っていた。

二つ目は、学校教育が新たな継承の場として加わりながら、学校で教授された芸能が地域における伝統芸能の一つとして展開し、かつ地域社会に受容されていた。その際、地縁的にも血縁的にも異なる人びとが、民俗芸能の実践を通して新たなコミュニティを生成していた。上述した1972年の奄美大島復帰40周年記念第47回鹿児島県民体育大会「奄美国体」で踊った男女で歌い踊る「奄高八月踊り」は、地縁・血縁に関わらず誰でも参加できることを特徴としている。この「奄高八月踊り」は、奄美大島の集落で受け継がれている八月踊りと同様に、歌いながら踊り、太鼓を叩きながら踊る形式をとっている。現在、奄美高校の在学学生のみならず、関東地区、関西地区に居住する奄美高校同窓会・配田ヶ丘同窓会と鹿児島県在住の奄美高校同窓会白

百合会を中心に、奄美の伝統芸能として受け継がれている。さらに、2014年からは、奄美市生涯学習講座名瀬地区(舞踊・体操)では、「奄美(配田ヶ丘)八月踊り」が習い事の一つとして行われている。

学校は国家による教育制度を背景としてつくられた場であり、そのために学校が相互に理解し、互いの活動を容認しあうことは決して容易ではない。しかしながら、実際には地域のさまざまな力が働く場であり、地域ごとの特異性が複雑に入り込む場でもあることが明らかになった。

また、従来の民俗芸能研究では、今日消滅ないし著しい変容をみせている現代の民俗芸能を論じるにあたり、地域との関わりのみに着目したものが多数を占め、学校との密接に関わりに焦点を当てた議論がなされない状況が続いている。本研究でも明らかになったように、近年、地域社会のみならず、学校などの教育現場でも民俗芸能が学ばれており、民俗芸能の継承をめぐる状況は大きく変化している。学校における民俗芸能の教育をどのように支援し、確立させて行くのかという課題は、その社会の歴史や文化の成り立ちを理解しないことには解決しない。

このようなことから、学校を民俗芸能の新たな継承の場として位置付けた上で、現代社会における民俗芸能の継承過程を捉える必要がある。今後、学校における民俗芸能の教育について、長期的な視野に立って検討を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

呉屋淳子, 「創造される奄美諸島の民俗芸能 鹿児島県立奄美高等学校の郷土芸能部の事例を中心に」, 沖縄文化協会公開研究発表会, 2016年6月25日, 名城大学。

[図書](計1件)

呉屋淳子, 森話社, 『「学校芸能」の民族誌 創造される八重山芸能』, 2017, 301頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

呉屋淳子 (Junko, GOYA)

山形大学・教育開発連携支援センター・講師
研究者番号: 10634199